



人権啓発コーナー

人権啓発標語

小中学生が、心のきずなを深め、いじめを許さない学校・学級づくりに対する意識を高めるために考えた標語を紹介します。人権尊重の視点に立った町づくりの啓発に期待できる作品です。

互いに励まし合い、「人権が尊重され、生きがいを感じられるあた

たかいまちづくり」を推進しましょう。

「だいいょうぶ？」 みんななかよし いじめゼロ

はなそうよ みんなのちがい すてきだね

「大丈夫？」 この一言でも 救われるんだよ

多様性 認め合って 明るい世界へ

命の明かり 唯一無二 笑顔つなぐ

「いじめダメ」 勇気を持って 言ってみよう

氷川中1年 坂本 理央さん

竜北中1年 長尾 芽依さん

竜北西部小6年 竹田 凜花さん

秋山 莉子さん

佐々木 智愛さん

河野 燎蔵さん

問 生涯学習課 0965・52・5860



地域おこし協力隊 活動レポート ②6



▲Instagram

12月25日に、まちづくり酒屋において「い草しめ縄教室」を開催しました。

氷川町産のい草を使って輪を作った後、竜北東小の5年生が稲刈りをしたもち米の稲穂、ぶどう染めの布、晩白柚の葉、乾燥蓮根などを使って飾り付けをしました。

皆さんオリジナルの素晴らしいしめ縄が完成し、喜ばれていました。



料理教室～晩白柚でムースケーキ・ちらし寿司・化粧水～

日時 2月18日① ① 10時～、② 13時30分～（各定員10人）
場所 文化センター調理室 参加費 500円 締切 2月10日⑤
持参物 エプロン、三角巾、マスク、タオル、保冷バッグ、蓋付きビン
申込先 地域おこし協力隊 蜂須（農業振興課内） ☎ 0965-52-5854



八火図書館だより

暦の上では冬が終わり、春に向

かって季節は移っていきます。

ただ「三寒四温」といわれるよう

に、寒さはもう少し続きますが、図

書館には、心が温かくなる内容の本

がたくさんあります。

読書に親しみ、暖かい春を待ちま

しょう。

新着図書紹介

一般書

若葉社の暮らし 畑野 智美
なんとかしなくちゃ。青雲編 恩田 陸
疲れた人に夜食を届ける出前店 中山 有香里
カニカマ人生論 清水 ミチコ

児童書

めをさませ 五味 太郎
いねむりおばあちゃんとぼく 高畠 じゅん子
本おじさんのまちかど図書館 ウマ・クリシュナズ
さかなクンのギョギョッと サカナ★スター図鑑
さかなクン

町民文芸

投稿先：〒869-4814 氷川町島地642番地
企画財政課宛（毎月5日必着）

短歌

ちはやぶる立神峽の冬の霧
水面かすかにせせらぎの音

北野津 井田 道寛

弁当を作って配るボランティア
作る喜び受ける喜び

西野津 古崎 スエノ

冬晴れの木陰のもとにバーベキュー
焼く茄子旨味の舌ならず

西野津 古崎 栄子

石段を数えつ登る初詣
神の水にて手を洗いけり

吉本 高橋 澄子

俳句

億光年夏の冬眠寝息なく

北野津 井田 道寛

忘年会心ゆるして夜の更ける

西野津 古崎 スエノ

ばらばらに飛んで何処へ冬雲雀

西野津 古崎 栄子

初詣み籤は中吉日本晴れ

吉本 高橋 澄子

第49回八火図書館本まつり

八火精神の継承と町民の読書活動
推進のために毎年開催している本まつり。今年は表彰や読書感想文発表のほか、「人形芝居かすべる」によるお楽しみ会などを開催します。

日時 2月11日④ 14時～

場所 氷川町公民館

おすすめ図書

おにたのぼつし

あまん きみこ

節分の日の話。姿は鬼だけど、本当は心優しいおにた。お腹をすかせた女の子のために、雪まみれになつてごちそうを用意するおにたの優しさに心が和みます。



問 八火図書館

☎ 0965・62・3489

「雪国」VS「山の音」

法道寺 本田 花風

会話の中で相手への返事を「ふむ」と幾度も使っている。「そうか」とか「うん」とか同調する傾きようがあり、そうなるもので、また女の表情においても、特に菊子の顔色を描く際に「顔をあからめた、赤くしたく」と恥じらいの様子を表現している。せめて「恥じらうように頬を染めた」程度の言い方はありそうなものだが。また「修一と菊子の話し声が聞こえた。菊子はあまえていた」や信吾付きの女事務員の英子を「胸がべちゃんこに見えた」と言い表すなどの言葉は、川端文学では想像しがたい言葉であり、女の姿を表現する際は、どの作品でも詳細であるのだが、「山の音」では実に単調な部分であるが、この作品にとっては有効な表現なのかもしれない。

作品を一読しての印象では、昭和初期の日本の夜明け前の時期であり、どこかで田舎のいわゆる谷（やと）谷の奥の北鎌倉を舞台にした「山の音」は初老の主人公「信吾」と家族、中でも嫁の「菊子」とのかかわりを主に家族間の心理的葛藤を美しい自然や風物と共に描かれたものである。

『山の音』は海外でも評価が高く、平成十四年にはノルウェー・ブック・クラブ発表の「史上最高の文学に選出されている。しかし、複雑な家族の葛藤は読めるものの、その葛藤をどう表現すれば作品の崇高さを理解できるものではない。